
paradox

理?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

paradox

【Nコード】

N5473L

【作者名】

理？

【あらすじ】

酷く矛盾したparadox。こんにちは、おやすみなさい。僕はどこですか、君はここです。僕は曖昧主義です、僕はただの超能力者です。これはエンターテイメントにも満ちません、ただの暇潰しです。君を潰します。

僕はただの曖昧主義です。それ以下にもそれ以上にも及びません。

今日の名言。 名東「死ね」

第・異血話目

面倒臭がる体を無理に起こして、僕は目の前に現れた景色を一点に見つめる。

いつもと何ら変わっちゃいねえ。嫌な風景だ。

「名東さん、おはよ」

僕は一言言い切ると、そのまま寝ていた床に体を倒した。

背中がコンクリートに当たってゴツリと鳴る音が聞こえた。

何気なく右手を上げると、そこに自分のものとは違う指が上から降ってきた。

「さんを付けるな。死ね」

朝の挨拶で死を勧められる僕は如何なものだろう。

「おはよ、名東さん」

「生意気なガキだな。死ねよ」

……こいつの長く伸びた銀髪を踏みにじりたい衝動に駆られた。

「うぜえ。朝から名前連呼してんじゃねえよ、くたばれ不動尊」

冷たいコンクリートで囲まれた殺風景な部屋、窓はない。広くはないが、一切の物が見当たらない。見事に立方体な箱のような部屋だ。

そんな冷たい部屋の中、もっと冷たい野郎と二人きり。

……いや、別にB L的な物語は発展しそうにないかな。相手がこの人だから、僕は別にそんな展開でも嫌ではないけれど。

「……不動尊と呼ぶんじゃねえ」

僕は小声で反抗を試みたが、わざとだろうか何だろうか、や、圧倒的に前者だろうけど、今度は名東さんの足が降ってきた。くそ……痛い。肋骨にヒットしたみたいだ。

胸を擦りながらぐいっと体を起こす。

「なんだ、起きんのか？」

気力のない気だるげな声。僕もその声に反応するように、横目に彼を見た。

「ええ……寝てても何にも始まんないでしょう。早く」

「脱出しましょ」

「……」

11月13日。金曜日。時間は 多分、朝の8時から11時くらいだろう。もっとも、時計も窓もないこの密室、時間を確認する術など大体でもないだろうが。

不動尊と呼ばれるのが不服なつまりこの僕は、隔絶されたこの部屋にて外部への脱出を試みていた。

ああ……この男と。

(自称) 23歳、職業運び屋、7月13日の金曜日生まれ。

真っ赤なジャケット（見るからに高そうだ）にエナメルの真っ赤なベルト、ジャケットの下には黒いシャツ、黒いズボン、また真っ赤なブーツ、真っ赤な手袋……それに、全身を飾りつける、更にこの男を目立たせる金銀のアクセサリーを、じゃらじゃらと。……いや、怪しい。

今は脱いでいるが、普段は自らの右目を隠すように、真っ赤な帽

子を目深に被っている。

と言うよりもまず目に痛い衣装に身を包むこの男だが、更に周りを近づきにくくさせる一点が。

……うぜえくらいに長い、この銀髪。

こいつの腰上あたりまで伸びるこの髪はさらりと綺麗なのだが、この銀色が異質なのだ。まあ、これもこの赤い男我流のファッションなのだろうから、敢えて突っ込んだりはしていない。

それに　この男、目つきは悪いが、異常なまでに整った顔立ちのせいでことなくそ派手なファッションであろうとも格好良く着こなしてしまうのだ（少々腹が立つ）。

炎のように赤く、鋭い瞳に、その赤色の背景のような白い肌。美青年であることは分かっているんだ。でも、またその顔立ちも合わさってか、狂人なのではと思わせるほどの異常さが際立つ訳である。

まあ、そんな風貌も、我が道をパンクした単車で突っ走るような性格の悪さで台無しなのだが。

さて　以上、名東　逸新いつしんのプロフィール。

ついでに僕のことも少々言っとこう。

17歳の普通の高校3年生のつもりをして生きている超能力者。終了。

まあこの超能力者と常識を超越した男が隔絶された空間に場を同じくするのは、ちょっと複雑な訳がある。

僕の幼馴染に、表社会に葵上財閥あおいのつえと名乗る悪徳企業の一人娘、世間的に言えば令嬢の大金持ちな娘がいる。名を葵上　昂すばる。

昂は昔っから僕に懐いてて、なかなか可愛い奴だった。

と、ある日（いや、つい一週間前か）僕が働いた一生の悪事によって、僕らの関係は一転する。

狩人と兎　言い過ぎか。

unclear principle　素直

に翻訳すれば、曖昧主義か。

「お前が今までにしたさ、最大の悪事って何だ？」

「……は？」

「お前が今までにした、最大の悪事って何だ？」

「……悪事……？」

「そう、悪事だよ。悪事。悪いこと」

「そのくらい分かってますよ。馬鹿にしないでください」

僕は相手の意図を図りつつ、適当に応える。

「適当なこと言うな。お前が今までにした、最大の悪事って何だ？」

名東は笑う。

「そんなの　突然、言われても」

「何でもいいよ。思い出せよ、不動」

「ん……」

僕は名東の方を向くのをやめて、視線を逸らす。こいつのこの笑い方は　怖い。

「小学生の頃、田舎の本屋で、本に挟んであったお洒落な栞見つけて、しれっとポケットに仕舞い込んだ」

「うん　規模の小せえ悪事だな。そんなくらい誰でもあるだろうよ」

「突然言われたんだから、このくらいしか思いつかないでしょう」

「そうだな。じゃあ、それについて考えてみようか」

「……こいつが今こうして僕に語りかけているのは、ただの暇潰しだろうか。僕にはどうしてもそう、思えなかった。」

「お前は、どうしてそんなことをした？」

「それは　欲しかったからでしょうね。その、栞」

にやり。

名東の口元が歪む。

「なら、買えばいいだろうが。その本、丸ごとき。そうすれば、盗みがばれるという。その悪事についての最大のリスクが消える。常識に則って、いや、法に則ってと言うべきかな……そいつが手に入るだろう」

「……普通ならそうでしょうね。金がなかったんじゃないですか？ 僕。それか、そんな紙切れ一枚のために何百円も払うのが惜しかっただけか。惜しいけれども、やはりその紙切れは欲しかった」

「成程」

名東は、ばしん、と床を叩く。コンクリートのこの部屋に、その音が響いた。

「分からなくもねえな。その気持ち、さ……金つてのはどうしても手元に置いておきてえものだもんな……だけど、お前、それが許されるもんだと思っちゃいねえか？」

「……あの頃は、ですね。子供だし小学生だし、まあ精神は既に中二病入ってましたけど。まあ法的に見ると許されるけど、心の内じや悪いことしたってのは分かって……」

「そこだよ」

名東は。

名東は突然僕の言葉を遮り 威圧のある瞳で、僕を眺めていた。楽しそうに、愉しそうな笑みを貼り付けたまま。

「自分は悪いことをしました。だけど許される。結局ばれない。駄目なんだよ、そんなんじゃない」

「は……」

「お前が本当に怖いのは、自分のしたことが世間に露見し、軽蔑されることじゃない。自分が正義に常識に、目エ背けることだろ。自分が自分を裏切ってることだろ！自分が自分の正義にさ、常識にさ、理念に裏切ってることだろ？」

僕は考えた。

僕はただの曖昧主義です。それ以下にもそれ以上に及びません。(後書き)

駄文で申し訳ないによ(・・・;
読んでくださってありがとうございます。続きも書いていく予定だによ
で、また宜しく願いますだによ。よければ評価もしてってください
さいによ(・・・(b

齋京 露範、復活はまだみたいです。まあ、帰ってきたら一瞬で世界撲滅さ

今日の名言。 名東「カス」

檻姫^{おりひめ} 摩訶^{まか}
折句^{おりく} 撫頼^{ぶらい}
齋京^{さいきやう} 露範^{ろはん}
虚詩^{きよし} 戯曲^{きぎょく}
葛葉^{かつは} 初裏^{ういり}
不動^{ふどう} □コ^{はこ}

そして

この最強であるはずの7人中、最も恐れられた存在。

今諫^{いまざわ} 真骸^{まがい}

第・煮話目

「……そんだけか？ 絶対不可止軍団のメンバーは」

「ええ。この7人ですよ、名前を出すだけでもぞっとしますけどね

……あの時、世界が一番平和じゃなかった時代、宇宙掌握する勢い
だった7人ですからね」

「宇宙掌握な。よく言ったもんだぜ」

「……。名東さん、あなた彼らのこと何も分かっちゃいないでしょ
う？」

「全然知らないね。だからこうやって手前に訊いてんだろうが。頭
を使え、間抜けが。あと俺のことを名東さんとか呼ぶな、うっぜえ」

「そこ、よく拘りますね。前から気になってましたけど、何です
か？」

「俺は苗字よりさ、逸新って名前の方が好きなんだよ。逸して新、あらた正に俺だろ？ だから名東とは呼ぶな、下の名前だったらどうとでも呼んでいいからよ、ボケカス」

「じゃあまず僕のことカス呼ばわりすんのやめてください……」

今日も名東のナルシストは絶好調のまま 大体、何故この僕がこの人にこんな話をしなきゃいけないんだ。

名東にはこれから色々世話になりそうだが、せいぜいこの部屋の中での付き合いだろう。まあ、その報酬として今のうちに僕の知ってることを吐いとくのも悪くはないか。どうせ、危ない目に遭うのは聞いてしまった方だ。

だが この話、している方も結構辛いんだけど。

「で、今はどうしてんの？ その、絶対不可止軍団『parado x』って奴ら」

「活動停止中みたいですよ。派手な動きは聞きませぬね、最近……平和が帰ってきただけいいんじゃないですか？」

「はん。俺は平和なんていらねえんだがなあ……」

多分無意識だろう、長く伸びた赤い綺麗な爪を、がりがりともう片手の爪で削る名東。

……今日は手袋外してんのか。

「ほんとに分かってないんですね…… 齋京 露範なんか。帰ってきたら一瞬で世界撲滅されますよ」

「んだそれ？ プロレスラーか何かか」
鼻で笑われた。

「そんな野蛮なもんじゃないですよ。見れば分かりますけどね」

僕も段々適当に喋りつつ、既に名東の方は向いていなかった（彼は最初から僕など見ていなかった）。

「へえ 気になるな、齋京……何て言った、露範か？ ふ、いい名じゃねえか」

「齋京 露範は絶対不可止軍団の中でも最強の部類でしょうね。まあ、名前にも因んでね。奴は格闘技の神です。腕でも脚でも体そのものでも自由自在に使いこなしますが、そんな野蛮なもんじゃなくて……流麗というか、流れるみたいに綺麗な動作なんですよ。ま、それを良い方向に言えば本当の神なんでしょうけど」

「は……絶対不可止軍団、つまりはどうせただの殺人鬼の集団だろう……齋京は素手で人を殺せます。このくらいなら熟練した人じゃなくても出来ないことはないかもしれませんが、齋京は素手で地球を潰^{くだ}せます。お世辞抜きでね」

「そりゃ、また……凄そうだな。会ってみたいもんだぜ、この俺も素手で車潰したとくらいならあるけどさ」

……。

名東のも十分伝説だが、齋京 露範、素手で地球の話聞いた後じゃどうも目立たない。やはりこれが絶対不可止軍団だったか。

「一目見るには、普通の……どっちかって言うと華奢な方の男なんだけどね」

僕は独り言のように呟く。

名東に絶対不可止軍団の詳細を教えた以上、この後の名東の行動なんて分かり切っている。僕の置かれる位置は決定した。

傍観者。

「名東さん……うーん……逸新さん？ 絶対不可止に手エ出したりしないでくださいね」

「馬鹿。手は出すが、おめえの関わるところで喧嘩売ったりはしねえよ」

さすが名東、分かっている。

だけど僕にはこれを止める義務があるだろう。齋京に手を出したりしたらブラックホールにまでふっ飛ばされるのは確かだ。これは齋京もそうだろうが、名東も細身な方だし……。

「あんだ、……そんなことしたら、本当の意味で死にますからね」

「だから……本当に馬鹿だな、無能無能。俺アね」

チツと舌打ちしつつも、にやりと満足そうに笑む名東。

僕はその笑みに、何だかぞっとするような妖艶さを感じた。……

いや、ホモ的な意味じゃなく。

「生まれた瞬間からずっと、死んでんの。死に続けてるわけよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5473/>

paradox

2010年10月11日12時46分発行